東日本大震災 ともしび会ニュースレター

2020 April

ごあいさつ

2011年3月11日の東日本大震災から、9年の月日がたちました。今年は新型コロナウィルス感染症の影響で、世界中が通常通りの生活が出来ない日々が続き、今までにない春を迎えることとなりました。

9年前、震災により卒業式を挙行出来なかった記憶が蘇ります。

延期が決まった東京オリンピック開催に向けて東北でも復興が進む中、今だ福島においては原発事故という未曽有の人災によりその復興の道のりには多くの困難があります。

現在ご支援をいただいている5名の学生のうち3名がこの春社会へ巣立つことが出来ました。彼女たちは皆様からの経済的な支えをいただき、たくましい精神力を培い、自ら生きる力を育み大きく成長しています。ご支援していただいたすべての皆様へ彼女たちからの感謝の思いをここにお届けさせていただきます。

東日本大震災ともしび会 代表　柴山　恵子

ごきげんよう。ともしび会の皆様、二年間という長い期間の中たくさんのご寄付をいただき誠にありがとうございました。卒業を控え、改めてこれまで支援してくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

この二年間、皆様のご支援のおかげで充実した最後の学生生活を送ることができました。短大入学直後は震災の被害のことや兄弟もいることから学費のことで不安がとても大きかったことを覚えています。けれど、ともしび会の方々からの支援のおかげで心配なく二年間を過ごすことができました。二年間の中で勉学に一生懸命励むこと、将来の夢のために短大進学という選択ができたこと、全てともしび会の皆様のおかげです。

私は、東日本大震災のとき当時小学五年生でした。塾でみんなと勉強をしている時、突如立っていられないほどの大きな地震が急に起こり、何が起きているのか全く分からず友達の叫び声や泣き声が飛びかい私は放心状態になっていました。余震もあったことから長くて大きくて恐ろしい地震でした。両親は仕事中だったため遠くにいるし、携帯電話も公衆電話も通じない状態だったので、心配とともに不安でいっぱいになり涙が止まらなかったことを覚えています。私は友だちと小学校に避難し、親の帰りをただただ待っていました。両親は無事帰ってきましたが、家に帰ってみると私の家はマンションなのですが、半壊しており自宅の8階まで危険で行けない状態でした。やっと入れるようになり家を見てみると窓ガラスは全て割れ、タンスや家電は全て倒れていました。このとき当たり前の生活はどれほど幸せだったか改めて実感しました。

食料もままならない状態だったので小学校に支援物資をいただきにいきました。そこでは栄養士さんが無償で支援物資のお手伝いや食事の提供をしていました。支援物資を受け取っている方々は笑顔でもらって行ったり、栄養相談をしていたりしていました。そこでは栄養士さんが食を通してたくさんの人を助けていました。私はそこでの栄養士さんの姿を見て感動しました。もともと食べることや料理を作ることが好きだったので食を通してたくさんの人を幸せにしたい、困っている人を助けたい、人の役に立てる栄養士になりたいと思うようになりました。支援物資の時に出会った素敵な栄養士さんのように。今では勉学の他にボランティアサークルの部長を努め、私のような微力でも助けを求めている人に手を差し伸べられるような人間になれるように様々なボランティア活動に励んでいます。

春からは保育園の栄養士・栄養教諭として理想の栄養士になれるように一生懸命頑張っていきます。このように夢だった栄養士になれたこと、学校に通えて勉強ができたこと、また新しい夢を与えてくれたことはともしび会の皆様の支援がなければ実現できませんでした。困っている人を助け、幸せを届けられるような栄養士になれるように努めていきたいです。また、基礎をしっかり学びいずれは管理栄養士になれるようにまだまだ勉強をしていきたいと思います。最後に、二年間本当にありがとうございました。これからの人生でこの感謝の気持ちを忘れることはありません。

（生活科学科 食物栄養専攻コース 二年）

ともしび会の皆さまへ

この度は温かいご支援を頂戴いたしまして誠にありがとうございます。

私は福島県飯舘村の出身です。震災の話、避難してからの生活、支援を受けての家族について感謝の気持ちを伝えさせてください。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きました。震災当初私は小学校五年生でした。私の家は学校からとても遠いところにあり、震災時はクラブ活動までの時間に委員会の仕事をしており、まだ友人と学校にいました。委員会の仕事を友人と会話をしながらしていると急に学校が大きく揺れました。

私と友人はパニックになり、叫びながら職員室の傍まで走りました。すると職員室にいた先生が「正面玄関から外へ行きなさい！」と私と友人に声をかけたが、パニックになっていた私は「職員室に来なさい！」と聞こえ、職員室へ入り、一緒にいた友人はきちんと聞こえていたため正面玄関へ走っていき、職員室へ入った私は友人が後ろにいなかったため、はぐれたのだとより一層不安になりました。

職員室では棚の上から外で遊ぶバッドやボール色々な資料が地震の揺れで上から降ってきてとても怖かったことを覚えています。先生が私を守りながら校庭まで連れて行ってくれ、泣きながらはぐれた友人を探し正面玄関の方へ向かいました。

すると友人も校庭の方へ歩いて来ていて会うことが出来、安心からかより涙が出ました。

弟も同じクラブに入っていたため、クラブまでの時間体育館にいたようです。体育館には椅子が積み重り、跳び箱などぶつかったら大けがをしていたかも知れないと考えられるものが置いてあったので、後から弟に「椅子とか崩れてきてもう少しで巻き込まれていた」と言われ危機一髪だったのだと、弟が無事でいてくれてほっとしました。

外にいると雪が降ってきて、クラブの監督が来ていたため監督の車の中で両親が迎えに来てくれるのを待ちました。両親が迎えに来て家に帰ると家の瓦が落ち食器棚から皿やグラスが落ちていました。幸い山の中に家があったため水も山の水を使っており、水が止まるということや、ガスを使っていたので電気が止まってしまってもガスコンロなどは使うことが出来、こたつも掘りこたつだったためみんなでこたつに入り寒さをしのぎました。

震災からほどなくして父が家族の安全と放射線から身を守るようにと栃木県の鹿沼市の体育館へと家族で避難しました。

避難先では私たちがストレスの無いようにとボールプールや卓球場、テレビなど遊ぶスペースや勉強できるスペース、シャワールームなどがあり、多くの支援物資が届けられていました。

四月になり、小学校再開の目途が立ったため福島市の公務員宿舎を借りて福島市から川俣町の小学校に村の送迎バスに乗り、通いました。

川俣町の小学校は川俣小学校が校舎の半分を私たちの為に貸してくださり、小学校の最後の一年間を過ごすことが出来ました。中学校に入学し、中学校は川俣高校の校舎をお借りし、一年生の一学期を過ごし二学期に入ると飯野町に仮設校舎が出来、飯舘村の中学校に入ることはできませんでしたが、三年間飯野町の仮設校舎で過ごし卒業し、高校へ入学し、ともしび会の皆さまや支援して頂いたたくさんの方々のおかげで現在、桜の聖母短期大学で保育の勉学に励んでおります。

二年生になり、もうすぐ卒業という時期ですが、二年生の一年間はとてもあっという間に過ぎました。実習や行事が多くとても大変でしたが同じ仕事を志す友人たちと励まし合い、乗り越えることが出来ました。

震災を経験し、環境ががらりと変わり、生活も変わり、様々なことが変化しましたが、福島市に避難しなければ出会うことがなかった出会いもたくさんあります。

家族に支えられ、桜の聖母短期大学に入学し、たくさんの先生方、ともしび会の皆さまに支援して頂き、今自分が、自分の夢のために勉強できることを、本当に感謝しています。

無事に保育園へ就職も決まり、保育士として本学で学んだこと、実習で学んだことを活かし、現場に出て更に自分の学びの場が広がり一人の社会人として貢献していくようになりますが、たくさんの方々に支援して頂き今の自分が在ることをそして感謝の気持ちを忘れずに、そして自分の培った学びを信じて精一杯頑張りたいと思います。

最後になりましたが、改めまして、短大生活二年間何不自由ない生活を送ることが出来たこと、私自身も家族も、ともしび会の皆さまに心から感謝しております。本当にありがとうございました。

（生活科学科福祉子ども専攻
子ども保育コース二年）

　ごきげんよう。この一年間、ともしび会の皆様には大変お世話になりました。温かいご支援に心から感謝申し上げます。

　東日本大震災当時、私は小学四年生でした。沿岸部に住んでいたため自宅は津波で流出し、住み慣れた街並みは姿を変え、元の姿を思い出せないほど悲惨な状況になっていたことを今でもはっきり覚えています。地震が発生した時、私は小学校で授業を受けていました。今までに体験したことのない強く長く続く揺れと棚から物が落ちてぐちゃぐちゃになる教室。初めて「死ぬかもしれない」と覚悟した瞬間でした。私の地元は被害が大きく、たくさんの尊い命と思い出が奪われ辛い思いをしました。しかし、当たり前だった生活が当たり前ではなくなり、ライフラインが途絶え不自由な生活を送る中で小学生だった私は人の温かさをしることができました。着の身着のまま逃げてきた私たちに、食材を持ち寄って炊き出しを行なってくれた地域の方々、毎日届く食料や生活必需品などの支援物資、人命救助やがれき撤去を行う自衛隊・米軍の方々、日本中から駆けつけてくれたボランティアの方々、外国からも届く支援物資と応援メッセージ。これからどうやって生活していくのだろうと不安で一杯だった私たちを日本中、世界中たくさんの人々に助けていただきました。そして今度は自分が人々を助けたい、支えたいと思い、小さい頃から好きだった食べること、ご飯を作ることを活かして栄養士になろうと決めました。私は今、夢に向かって桜の聖母短期大学で日々勉強に努めています。学内のカフェテリアでの実習があったり、スーパーマーケットとのお弁当開発を行なったり、聖母での学びは知識を得るだけでなくそれを実践し、栄養士に必要な力を身に付けることができます。

　また私は栄養教諭の免許取得にも挑戦しています。子どもと接することが好きなため、将来は子供たちに食育を行いたいと考えています。来年には学外実習があり、子どもたちに食の授業を行います。先生として教えるには確かな幅広い知識が必要であり、子どもたちにとって意味ある授業が行えるように学びを深めたいと思っています。私は、自分の小中学校時代の給食を作ってくれた栄養士さんが憧れの存在です。その栄養士さんのつくる給食は、おいしいことはもちろんアイデア豊富で、生徒も先生もみんなが楽しい時間を送れる給食を提供してくれました。私も給食を通じて子どもの成長を支え、給食を食べた子どもたちみんなを笑顔にできる栄養士になりたいと思っています。そのためにこれからも頑張って参ります。

　ボランティア活動では、児童館・老人ホームでのお祭りのお手伝いやおもちゃのイベントなどに参加し、たくさんの子どもとお年寄りに接し、貴重な経験を得ることができました。老人ホームでのボランティアは、職員の方のホスピタリティの高さに感動しました。利用者さんに楽しんでもらうための工夫や努力は施設に行かなければ知ることはできなかったと思います。

　利用者さんの喜んでいる笑顔を見た時はこちらまで嬉しくなり、人の役に立つ仕事のやりがいを感じました。

　この一年充実した学生生活を送ることができたのは、ともしび会の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。これからも将来の夢に向かって様々なことに挑戦し、努力を続けてまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

（生活科学科 食物栄養専攻コース 一年）

　ごきげんよう。このたびは、ともしび会の皆さまに暖かいご支援を頂き、誠にありがとうございます。ともしび会の皆さまのおかぜで、学業に励むことができ、大変感謝しております。

　震災時、私の家は傾き、水道が止まってしまい、大変不自由な暮らしが一週間程続きました。震災後、家の傾きは当時に比べ、大分良くなり、水道も直りました。

　私の家は、農業で、菊や梅、桜の栽培をしているのですが、震災の影響で原発事故が起こり、その影響で収入が減ってしまいました。

　その時、私は小学生で、何故家族が困っているのか、放射線の影響についてあまり深く考えておらず、他県の人たちが福島の農産物を食べたくない、買いたくない、福島に行きたくないという声をテレビで聞いて、「何故皆福島に来たくないのだろう」と不思議に思うのと同時に、大変悲しくなりました。

　震災後の福島は、他県からの偏見が酷く、私は「福島の人が東京のようなところに行ったら、いじめられるのではないか」と不安になりました。

　東日本大震災が起きてから九年が立った今でも、震災当時に比べて、収入は少し増えましたが、今でも福島に対する偏見も多少残っており、収入は震災前のようには戻りませんでした。

　ですが、多くの方々に支えから、高校、大学に行かせて頂きました。私の両親は、私が進みたい道に進めるよう、多少の不便はありましたが、私のやりたいと思っていた道まで進ませて頂きました。

　今も、両親だけでなく、ともしび会のみなさんや周囲の人たちのご支援のお陰で、なりたい自分に向けて学ぶことができ、大変感謝しております。

　現在私は、就職が決まり、事務関係の仕事を行うことになります。そのために必要なことを一生懸命勉強に励んでおり、この感謝の気持ちを忘れないように、仕事に打ち込もうと思います。

　ともしび会の皆さま、この二年間ご支援を頂き、本当にありがとうございました。

（キャリア教養学科 二年）

ともしび会の皆様へ

ごきげんよう。この度は温かいご支援を頂戴致しまして、誠にありがとうございます。皆様のご支援のおかげで無事、桜の聖母短期大学での学生生活を送ることができています。東日本大震災の影響により、不安を抱えた私は大学進学に迷いを持っていました。さらに私が高校生のとき、自分が大学で何をしたいのか、何を学びたいのか明確にイメージできていませんでした。そのため、どこの大学に行けば良いのか、むしろ就職をするべきなのかなど悩みが多くありました。

東日本大震災から九年たった今も、あの日のことは忘れることはありません。この先も忘れることはきっとないでしょう。

私は当時小学生四年生、まだ十歳でした。震災当時はただただ恐怖と不安にかられていました。まだ子どもでもなにか異常なことが起きているということだけ、頭のどこかで感じていたように思います。震災後、私自身の身体には被害はありませんでしたが、あの震災で心に大きな傷を負ったことは間違いありません。

加えて、父の転勤先が南相馬地区だったことで、震災後すぐ無事が確認できない状況でした。当時は母と私と近くの学校で何日か過ごし、近くの祖母の家にお世話になりながら、父の連絡と帰りを今か今かと待っていたことを覚えています。

家族全員が怪我せず家も大きな被害はなく無事でしたが、父の会社が原発の影響を受けてしまい、無くなってしまったのです。そうして家族は金銭面での不安を抱えることになりました。そのために大学進学を踏み止まってしまっていたのです。こんなにも両親が苦労しているというのに、私は大学に行っても良いのか、と。

しかし、そのような中で高校の担任の先生から桜の聖母短期大学を進めていただいたことと、ともしび会の皆様のご支援のおかげでこの大学への入学を決めることができました。また、大学の先生方やともしび会の方のお話を聞く中で、私自身の大学生活をイメージすることができました。そして申請させて頂き、現在に至ります。

今、私が不自由なく、自分らしい充実した日々を過ごすことができているのは、両親や家族、そしてともしび会の皆様方の支えのおかげです。

今までの自分では考えることが出来なかった、自分への挑戦をいくつもすることができています。

その一つとして学生会へ入ることがあります。以前の私は消極的で人の前に立つこと、中心的ポジションに立つことはまずありえないことでした。

しかし、今までの自分の選択肢になかった選択肢を選ぶこと、新しい挑戦をしようと思い行動に移すことができたのは、この学校で学生生活を送ることができているからだと思っています。桜の聖母だからこそできた経験の中で自らの成長を感じることができました。

当たり前だと思っていたことが当たり前でないことを経験した身だからこそ、よりありがたみを持って、今生きていることや日常生活を過ごしていきたいと思っています。これからも自分の夢に向かって勉学に励み、たくさんの経験をこの桜の聖母短期大学で積むことができることを心から感謝申し上げます。今後も皆様への感謝の気持ちを忘れず、精一杯努力して参ります。本当にありがとうございます。

（キャリア教養学科　一年）

東日本大震災 ともしび会事務局

福島県福島市花園町３番６号
学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム
法人事務局　熱海（あたみ）　紀子（のりこ）・齋藤（さいとう）　桑子（そうこ）
☎024-531-6805　Email:s-soko@ssg.ac.jp

ご寄付振込先

【ゆうちょ銀行】02230-4-126091
東日本大震災ともしび会寄付金口
【東邦銀行　本店】普通預金3682660
東日本大震災ともしび会
代表　柴山　惠子

今年度もたくさんのご支援をありがとうございました。

東日本大震災から九年目を迎えた三月十一日。今年は、日本中、世界中が新型コロナウィルスの影響でいろいろな不自由をお互いに抱え、支え合う日々となりました。

あたりまえの日常がどんなに幸せだったのか、震災と重ね合わせながら、皆様に感謝をし、希望に満ちた子どもたちが綴ったお手紙に胸が熱くなります。

皆様からのお力添えを励みに今後も未来ある福島の子どもたちを応援し、寄り添ってまいりたいと思います。

末筆となりましたが、皆様からお寄せいただきましたご厚情に重ねて御礼申し上げますと共に、皆様の上に神様が豊かにお報いくださいますようお祈り申し上げます。

感謝のうちに

ともしび会事務局
熱海　紀子
齋藤　桑子